

## わたしの シロ

シロが いません。

赤ちゃんの ときから、ずっと いっしょに くらしていた シロが いません。  
わたしが よぶと、すぐに こたえる シロが いません。

けさの 地しんで、こわれた 家から やつとの ことで はい出た わたし。

「シロー。シロー。」

名前を よんでも、へんじを してくれません。

自分で 外へ 出たのかな。

どこかへ にげたのかな。

ひなんしよに むかう 間も、お父さんや お母さんと いっしょに、

「シロー。シロー。」

と よんで みましたが、シロは こたえません。

夜に なっても、つぎの 日の 朝に なっても、また、その つぎの 日になっても、シロが いません。

五日目の 朝、みんなで こわれた 家の かたづけを しました。

こわれた げんかんの くつばこの 下に、白い ものが 見えました。

「シロだ。」

お父さんも お母さんも わたしも、ぐったり している シロを、いっしょうけんめいた

すけようと しましたが、はしらや かべが おもすぎます。

「シロー。」

きんじょの 人や、通りかかった きゅうじょたいの 人たちも てつだって くれました。

シロは、たずかりました。

わたしは、けがを している シロを ぎゅっと だきました。

シロは、「クーン、クーン。」と なきながら からだを すりよせて きます。

わたしの なみだは、止まりませんでした。

見ていた 人は、はく手を して いました。